

# La Lettre

— DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo —



笹川日仏財団  
ニュースレター  
Vol. 1 No.2

## 「自由の女神像」が東京湾に



昨年11月、フランスのシラク大統領が訪日した際、橋本総理との首脳会談で多方面にわたる両国間の相互理解を深める必要性が求められた。この

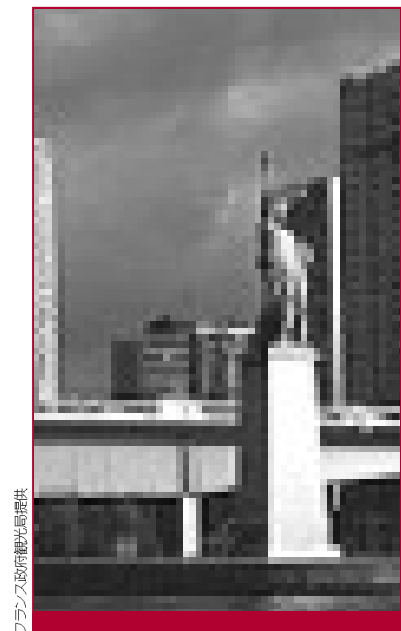
ご紹介しよう。フランスを紹介する上で大きく4つに分かれたテーマは『永遠の国』『発明の国』『芸術の国』そして『日本人の心のなかの国』である。

またフランスといえば芸術だが、『発明の国』としても注目したい。今回パリ市内の一角にあるラ・ヴィ

レット科学産業都市をモデルとした『子供の国』の展示が興味を引く。難解な科学の世界を遊びながら学ぶことで大成功を収める試みはこの眼で確認できる。

フランスで「フランスにおける日本年」がスタート。そして来年はいよいよ日本での「日本におけるフランス年」が実施される。

両国はユーラシア大陸の東と西に位置し、地理的には遠く離れている。しかし優れた歴史や文化を保ちながら、芸術や産業



セーヌ川にかかるグルネル橋と「自由の女神像」

3〜12歳が対象だが人体の内部をみる装置や指紋で知る君と他人



このロゴマークと共に来年はフランス発見の年にしたいものである。

でも新技術を進展させる土壌を持つ共通点がある。また21世紀を目前に高齢化社会、エネルギー問題など共通の課題も抱えている。その中でお互いを知ることはこれらの問題解決にもつながる可能性を秘め、大きな意義を持つだろう。そこで来年の4月開幕を前に「日本におけるフランス年」のプログラムをいくつか

その中でも特に話題性のあるのは『永遠の国』フランスから来年4月東京湾にやってくる「自由の女神像」。これはフランスがアメリカ建国百周年を祝って贈った像のお返しとしてフランス革命百周年記念にアメリカが贈ったもの。かつては大統領官邸に背を見せないよう川上を向いていたが、ニューヨークの像と

など大人でも充分楽しめるものだ。そして『芸術の国』フランスでは、日本の若い女性に圧倒的な人気のデザイナー、アニエス・ベーの選んだ7本の映画を日本全国を縦断する映画祭で上映。映画を通して彼女の創作の秘訣を知り、そこからフランスを知ることができる(5月から)。



パリ19区にあるラ・ヴィレット科学産業都市

# 古であり新しい、日本の心をフランスへ

フランス各地で実施されている「日本年」。  
そのイベントの一つで当財団の助成の対象となった  
『ネオ・ジャポネスク'97』は、「日本文化伝統産業近代化促進協議会」  
による21世紀へむけての新しい文化提案である。  
帰国直後の同会々長表博晃さんを訪ねお話を伺った。

10月29日パリ市内、ルーブルに  
あるガブリエルホールは当日約五  
百人の観客で埋まり、立ち見もで  
る盛況ぶりだった。多くがファッ  
ション、アート関係のフランス人  
ジャーナリストだが全く無名の日  
本人のステージにこれだけの人数  
が集まったのは異例のことだとか。  
タイトル『天、地、人』にあると  
おり、内容は天地によって、こ

から何かを感じ取っていた日本人  
の心の原点を「象徴している。  
テーマの『古であり新しい』は舞  
台背後に隠し持つ精神性にはもち  
ろん視覚的にも表れている。それは  
西陣織の衣装から漆の髪飾り、竹  
細工の大壺まですべて匠たちが作  
った本物の工芸品の放つ荘厳さに  
加えて斬新なデザインで古と現代

フランス人モデルによく似合っ  
ていた。そして西陣織りの金糸銀糸  
の織りなす絢爛とした装束はパツ  
チワークのように所々に赤や青の  
色鮮やかな伝統の寄せ裂が配され  
ている。龍神にたとえた力を倒す  
場面で表さんが着た衣装は京都の  
山科褰たによる袴をたくしあげ、綿入  
れの筒状の袖で西陣の華やかさと

第1ステージでは巨大な竹籠に  
季節ごとの花々を表さんが投げ入  
れて自然に対する畏敬を表わした  
アートとなった。それは四季の始  
まりが春ではなく冬だとした古代  
日本の言葉『御霊の冬』を内包して  
いる。「発動する芽がすでに冬に土  
の中にあることをしっかりと見つ  
め、その混沌としたエネルギーを

野袴をアレンジし  
たパンツルック。  
しかも光る素材で  
シースルーであ  
る。またピンクや  
ブルーの総鹿の子  
絞りで詰め襟式の  
盤領あけくちと呼ばれる上  
着と脚絆をはいた  
下袴の組合せは

共にその力強さを現代のもの  
として表現した。いずれも  
日本古来の伝統文化が現代に  
蘇る試みとして見ることで  
きるデザイン性に満ちている。

フランス人に  
理解してもらえなかった  
『御霊の冬』



のだという。しかし日本の四季が  
春からでしかないという固定観念  
に捉われているフランス人にはな  
かなか理解されず苦勞したと表さ  
んは振り返った。  
またすべてを乗り越えた美の象  
徴の巫女ともいえる女性が屹立す  
るのが第3ステージ。ここでは庄  
倒的な自然音の中で表さんが現在  
も続ける修業の一つ、襖の古典手  
法から『雄叫び』が披露された。生  
きる魂の根源を掘り起こす秘儀、  
生く霊たま、足る霊たまという掛け声が幻  
想的に会場に響いた。「今その意味  
が分からなくても本物をやってお  
くことに意味がある」。この信念の  
基に『印を切る手組み』も随所に用  
いられ、芸術性だけでなく日本の  
古代を知る意味でも貴重な舞台と  
なったのである。

自然は常に私たちに何かを  
伝えようとしている

すでに昨年、ミラノやギリシャ  
で同じ公演を行なったが、内容は  
一貫して、いるがステージングは



それは「自然の音を声  
として聞き分ける、そー

その国柄、土地柄にあわせて一度として同じものはない。今回のパリ公演でも色使いはミラノの時のような明るさは正反対にシックなセピアカラーをベースに使用。演出的にも



古代の文字で「人」と書かれた「土・雨」の日本公演プログラム。

装束をまとってパフォーマンスをする表さん。

ミラノではスペクタクルとしての新しい試みを感じさせるショー的要素が強かったが、今回は舞踏などを取り入れ人間の情念や煩悩を表現、思考を促す舞台となった。その結果、観客の反応はいたって真剣。パフォーマーとして出演していた表さんは舞台上から深く意味を理解しようとする観客の視線を肌で感じたという。「フランス人は哲学を見ようとする人たち。さまざまな感想の中で最もうれしかったのは、すでに行き詰まりを感じていた日本文化に未来に伸びゆく可能性を発見した」と言われたことです。

フランス公演は本来の日本観を様々な角度から知ってもらおうよい機会となった。そして日本人の心の原点をもう一度見つめ直し、目覚めさせながら根付かせていきたいと表さんは使命感に燃えている。

「明治以降いままでも私たちは、国際化の波に流され世界の文化を吸収することに躍起になってきました。そしてともすれば西洋三千年の歴史に勝とうとする発想をし

てきました。でもそれ自体おこがましいこと。それよりも自然を征服しようとした西洋に対して日本は自然との調和を胸を張って言える唯一の民族。この日本観を持って世界に貢献すべきなのです。」

緑豊かな森に囲まれ、山岳信仰から自然と共生していたのが古代日本人。『侘』『寂』など日本文化はすべて自然から湧き出てきたものの集積にほかならない。「自然は常に私たちに何かを教えようとしています。山や木、土から学べるものがあるのです。」

一見単調な鹿おどし音の余韻からも無限を感じさせる。そこにこそ日本文化の真の新鮮さが潜んでいるのである。

### 21世紀へ発信する日本の古の心

今回、ループルの公演だけでなく日本大使館広報文化センターに於いて作品展示も三日間開催された。これは日本の伝統工芸の匠たちの技の伝承を憂慮して表さんが発足させた会による。「暮らしの中

の古であり新しいをコンセプトに匠たちによって製作されたものの展示である。因みに表さんがデザインした作品はユニークな流線型の漆のテーブルや炭を入れるための陶製の鉢などだったが、その斬新さがシュールだと大きな評判を呼んだ。舞台上の衣装や小物も、この会の匠たちの発表の場と言えた。その伝統性と現代性を合わせ持つ作品群は概してフランス人の心をしっかり捉えたようだ。

しかし一方で、ステージの内容に関しては受け取り方は千差万別彼の演出力の可能性に期待する意見もあれば表現が意味不明で伝わらないとした意見もあり賛否両論だった。たとえば日本の生け花の「型」、神道の「行」などは、姿だけで所作ごととして洗練された動きがある。見るものはそこに精神性を見だし美しさを感じる。美とは、動き一つをとっても説得力を要

するのだろうか。特に魔物が住むという舞台は日常とは別の説得力が要求される。彼の強烈なメッセージを知るだけにその力不足を惜しむ声があがった。しかし音楽に対する評価は高かった。自然音に加え、鐘の音や古代楽器の笙、琵琶、シンセサイザーなどが重なり合ってそれは遠く原始の音に聞こえ、かつ宇宙から届く音にも聞こえ想像力をかき立てさせられた。

表さんは、創作の源はイメージネーション、つまり「ひらめき」だという。本来「ひらめき」に最も長けていたのが日本人。「それは内側から湧き出るもので外から勉強して考えて得られるものとは違います。それを教えてくれるのが自然なのです。」

そのひらめきに説得力が加わってこそ、彼のメッセージは確実に相手に届いていくだろう。

今や国境や人種、宗教を越えて地球規模で新しい価値観を見いだしていく時代。そのときに日本に生まれた意味を私たち日本人自身が把握し、誇りを持ち、



自信を取り戻すことが今求められていると表さんは信じている。日本人の根底に流れる自然崇拜の心こそ21世紀を支える価値観。フランスは西洋文化圏の発進地である。そのフランスで日本観を表現できたことは表さんにとって大きな前進となった。「古代日本観が必要となる時代が必ず来るとようやく胸を張って言えるようになりました。」

日本の古の価値観を新しく伝えることは世紀末に向けて深い意味を持つ。そのスタートラインに立った表さん。今後のその無限の可能性に期待したい。

### 日本文化伝統産業 近代化促進協議会

関西の若手実業家やデザイナー、伝統工芸士らが中心となって1995年大阪に設立。会長は今回の舞台のプロデューサーで演出家でもある表博晃氏(35)。日本の文化や伝統作品にある技術や精神を世界の人々や文化、生活にあう形に一新しながら提案していくことを目指す。展示会やシンポジウム、ショーなどの活動を活発に行う他、家具、器、新建材や化粧品まで生活全般に及ぶ商品の開発を手掛ける。「ネオ・ジャパネスク」シリーズのほか、新ファッションを提案する「織人」などをこれまでに発表している。

## Petite note

編集後記

悲願のサッカーワールドカップ  
出場を果たしたニッポン。  
初出場がフランス大会なのも、  
それが「日本におけるフランス年」  
に重なるのも何かの縁。  
これを機にさらなる出会いを  
期待したい。

(M)

笹川日仏財団ニュースレタ

## La Lettre

1997年12月発行 Vol. 1 No. 2

発行人：富永 重厚

編集人：横山 道雄

発行：笹川日仏財団

〒108東京都港区三田3-12-12

TEL：03 (3769) 6252

FAX：03 (3769) 2090

## A propos de nos projets...

最近の事業から

### 「日仏企業における コミュニケーションと 意思決定」——講演会

当財団富永理事長が10月23日パリ本部にて、自らの体験を踏まえ、企業や資本主義に対する日本とフランスの考え方などについて話をした。

例えば日仏双方で共同計画を立て、実行の一手手前まで行きながら最終段階で「ノン」。「フランスとの仕事は金輪際御免」という最悪の印象だけが残るケースがあった。このエピソードを解く鍵として、

日本とフランスでの意思決定のプロセスの違いがある。すなわち日本ではボトムアップに物事が決定されるのに対し、フランスでは意思決定者は常に組織のトップ。中間管理職や取締役は決定プロセスを知らされず、部下はその決定に従う存在でしかない。だから突然中止の命令が下ったりする。

逆に共通点もある。日本でもフランスでも経営に対する監視が徹底しておらず、経営者にふさわしい能力と品格が問われていることだ。

M・アルベールの「資本主義対資本主義」によると、資本主義には個人の成功と短期利潤を目的とするアングロ・サクソン型と、集団の成功と長期的利益を追求するライン型があるという。市場を形成するのは人間であるが故に、背景に持つ文化の違いによって資本主義にも様々なタイプができるからだ。

フランスは、カトリックの影響と農民気質の伝統により、利潤に対する拒絶反応が強いわばライン型。しかし次第にアメリカ型の市場原理に基づいた利潤追求型の資本主義に近づきつつあると警鐘を鳴らす。

日本でも昨今はアメリカ型資本主義が万能であるかのごとく「市場開放」や「規制緩和」など掛け声ばかりを先行させている。とはいえ、明治以来の社会の根幹をなしてきた日本の精神がこのような単純な方便で変わる筈もない。では21世紀の世界に向け日本はどのようなビジョンを発信できるのか。日本の伝統的価値観、つまり仏教文化の影響を受けたアジア諸国共通の哲学にこそヒントがあるのではないか。

## A la carte

ア・ラ・カルト

日本人の知っている有名フランス人

在日フランス商工会議所が編集する雑誌「France Japon Eco」97年

特集「日本におけるフランスのイメージ」に関するアンケートの結果をほんの一部だけご紹介しよう。

知っているフランス人を書いてもらおうと企画されたのは、ドゴールやシラク、ミッテランなどの大統領。企業管理職や大学教員の層では、この種のアンケートのいわば常連、アラント・ドロンやジャン・ギャバン、カトリーヌ・ドヌーヴなどの俳優の名がベストテン入り。そして大学生や一般人



シラク大統領

リストから名前を選択するのであれば、フィドラーイバーのアレシヤ女優のソフィー・マルソーなど現在活躍中の著名人も出てくるが、自由回答となると、ジャン・レノやシャルロット・ゲンズブール、ミッシェル・プラティニの名前が学生層で若干拳がった以外、大部分が古い世代のフランス人だった。なお、一般層での知名度が高かった、フランスワーズ・モレシヤンというのはうなずける。



「日本におけるフランス年」の特別親善大使となったジャン・レノ

また、名前を挙げた人数が一番多いのは大学教員層で6人弱これに対して、一般層は2人弱、大学生に至っては1人強でしかなく、日本でのフランス認識の低さを知らされる。



太陽王ルイ14世

この他、驚いたことに、エリザベス2世やチャーチル、ジェームズ・ボンドを挙げた人もいたとか。



日本で最も有名なフランス女優カトリーヌ・ドヌーヴ

## プロジェクト・カレンダー

98年1月～3月

1月19日～31日

《写真展「日本の光景」》

《フランス人若手記者が見た日常の日本》  
ディアフラグム協会/於パリ

1月9日～13日

《フランスダダの100年》

《フィルムから探るフランスダダの歴史》  
芸術振興協会/於横浜

1月19日～2月28日

《「夕鶴」パリ公演》

《フランス人女形が演じる木下順二の代表作》  
テアトル・デュ・タン/於パリ

1月28日～2月1日

《エクスボラック98「名譽招待国日本」》

《言語、文化、旅行、翻訳の国際展示会》  
エクスボ・ジャボン98組織委員会/於パリ

2月下旬

《日仏パネルディスカッション》

《日仏の教育事情 家庭と職業の観点から》  
パルクラフ/於東京

3月21日～31日

《「コーロ・カオス合唱団フランス公演」》

《フランスの影響を受けた現代日本音楽の紹介》  
コーロ・カオス/於パリ等

## 東京事務局からのお知らせ

日本在住の方の次回助成申請の締切は1月31日です。

これは1998年5月以降に行われる事業が対象となります。お早めにお申し込み下さい。

詳しくは東京事務局

(Tel: 03-3769-6252) まで。